

Ⅱ. まえがき 浅海域における砕波現象を解明することは、海岸浸食を考えるにあたって重要な問題である。著者らはすでに、波動場の方程式をデカルト座標系から楕円座標系に変換することにより一様勾配斜面上で砕波する波の理論近似解を求めたが、水深が非常に小さい場所では、誤差が増加する欠点があった。本研究では、この問題点を考慮した別の理論解を求めることとする。

Ⅱ. 理 論 水平座標 x および鉛直座標 z を、沖波波数 k_0 を集めて、時間 t を、角周波数 ω を集めて、また、速度ポテンシャル ϕ を、 k_0^2/ω を集めて無次元化する。以下、無次元化された諸量に、' を付す。次に、一様斜面上の領域 z 平面を一様水深領域 w 平面に変換する写像関数を、 $w = \log z'$ で与えると、 (x', y') 座標と、 (χ, η) 座標の対応は、 $x' = e^{\eta} \cos \chi$, $y' = e^{\eta} \sin \chi$ となる。次に、水平座標の圧縮パラメータ δ を用いて、 $\lambda = \delta \chi$ とおく¹⁾。基礎方程式の非線形項を無視し、微小振幅波のオ-ダ-で考えると、

$$\left. \begin{aligned} \delta^2 \phi_{xx}' + \phi_{yy}' &= 0 \\ \phi_{\eta}' &= 0 & ; \eta = -\theta_0 \\ \phi_{\chi}' + \eta' &= 0 & ; \eta' = \eta^* \approx 0 \\ \eta' - \cos \chi \phi_{\chi}' / e^{\eta} &= 0 & ; \eta' = \eta^* \approx 0 \end{aligned} \right\} (1)$$

となる。ここで解を、

$$\phi = A e^{i\chi}, \quad \eta = Y e^{i\chi}, \quad \chi = \delta' \int k_0 dx + t' \quad (2)$$

と仮定し、式(1)に代入すると次式が得られる。

$$\left. \begin{aligned} A_{\eta\eta} - k_0^2 A + i\delta(2k_0 A_{\eta} + k_{\eta} A) + \delta^2 A_{\eta\eta} &= 0 \\ A_{\eta} &= 0 & ; \eta = -\theta_0 \\ Y &= iA & ; \eta' = 0 \\ \cos \chi A_{\eta} / e^{\eta} - A &= 0 & ; \eta' = 0 \end{aligned} \right\} (3)$$

次に、 A , Y および k_0 を、微小パラメータ δ を用いて振動展開すると、

$$A = A^{(0)} + \delta A^{(1)} + \delta^2 A^{(2)} + \dots, \quad Y = Y^{(0)} + \delta Y^{(1)} + \delta^2 Y^{(2)} + \dots, \quad k_0 = k_0^{(0)} + \delta k_0^{(1)} + \delta^2 k_0^{(2)} + \dots \quad (4)$$

となる。これらを式(3)に代入し、 δ^0 および δ^1 のオ-ダ-で整理すると、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} \langle \delta^0 \rangle \quad & \left. \begin{aligned} A_{\eta\eta}^{(0)} - k_0^{(0)2} A^{(0)} &= 0 \\ A_{\eta}^{(0)} &= 0 & ; \eta = -\theta_0 \\ Y^{(0)} &= iA^{(0)} & ; \eta' = 0 \\ \cos \chi A_{\eta}^{(0)} / e^{\eta} - A^{(0)} &= 0 & ; \eta' = 0 \end{aligned} \right\} (5) \\ \langle \delta^1 \rangle \quad & \left. \begin{aligned} A_{\eta\eta}^{(1)} - k_0^{(0)2} A^{(1)} &= 2k_0^{(0)} k_0^{(1)} A^{(0)} - i(2k_0^{(0)} A_{\eta}^{(0)} + k_{\eta}^{(0)} A^{(0)}) \\ A_{\eta}^{(1)} &= 0 & ; \eta = -\theta_0 \\ Y^{(1)} &= iA^{(1)} & ; \eta' = 0 \\ \cos \chi A_{\eta}^{(1)} / e^{\eta} - A^{(1)} &= 0 & ; \eta' = 0 \end{aligned} \right\} (6) \end{aligned} \right\}$$

となる。 δ^0 のオ-ダ-の解を求めると、

$$\left. \begin{aligned} A^{(0)} &= -i a \cosh r (\eta + \theta_0), & \phi^{(0)} &= a \cosh r (\eta + \theta_0) \sin \chi & \text{ただし, } r &= k_0^{(0)} \\ Y^{(0)} &= a \cosh r (\eta' + \theta_0), & \eta^{(0)} &= a \cosh r (\eta' + \theta_0) \cos \chi & \eta^{(0)} &\text{は水面を表す。} \end{aligned} \right\} (7)$$

$$(r/e^{\beta}) \tanh(r/e^{\beta} \cdot h) = 1$$

となる。ここで、 $\alpha = r(\gamma + \theta_0)$ と書くとき、 $A_{\gamma} = rA_{\alpha}$ 、 $A_{\gamma\gamma} = r^2 A_{\alpha\alpha}$ が得られる。これらを考慮し、式(7)を式(6.1)に代入すると、

$$A''_{\alpha\alpha} - A'' = -2r^2 A_{\gamma\gamma} \alpha \sinh \alpha - r^2 (2A_{\gamma} r + A_{\gamma\gamma}) \cosh \alpha - i \cdot 2ar e^{\beta} \cosh \alpha \quad (8)$$

となり、したがって、 $e^{\beta} = 0$ となる。式(8)の特解を、

$$A'' = C_1 \alpha^2 \cosh \alpha + C_2 \alpha \sinh \alpha \quad (9)$$

とし、式(8)に代入すると、 $C_1 = -1/2 \cdot r^2 A_{\gamma\gamma}$ 、 $C_2 = -r^{-1} A_{\gamma}$ となる。また、式(8)の一般解を、

$$A'' = C_1 \alpha^2 \cosh \alpha + C_2 \alpha \sinh \alpha + C_3 \sinh \alpha \quad (10)$$

とし、式(6.2)に代入すると、 $C_3 = 0$ となる。したがって、式(6)の解は、次式の様になる。

$$A'' = C_1 \alpha^2 \cosh \alpha + C_2 \alpha \sinh \alpha, \quad Y'' = i(C_1 \alpha^2 \cosh \alpha + C_2 \alpha \sinh \alpha) \quad \text{ただし、} \alpha^* = r(\gamma^* + \theta_0) \quad (11)$$

一方、振幅 a の水深の減少に伴う変化は、エネルギーフラックスの保存則を適用すると、

$$a^2(r\theta_0 + 1/2 \cdot \sinh 2r\theta_0) = C \quad (12)$$

と表わされるが、 $H''/2 = a \cosh r\theta_0$ の関係を用い、沖波波高を H_0 と書くとき、

$$(H_0/2)^2 = \lim_{r \rightarrow \infty} (H''/2)^2 = \lim_{r \rightarrow \infty} \left\{ C / \left\{ (2r\theta_0 / \cosh 2r\theta_0 + \tanh 2r\theta_0) / (1/\cosh 2r\theta_0 + 1) \right\} \right\} = C \quad (13)$$

となる。したがって、

$$(H_0/2)^2 = a^2(r\theta_0 + 1/2 \cdot \sinh 2r\theta_0) \quad (14)$$

により、 a を求めることができる。また、 C_1 および C_2 に含まれる r および a_{γ} は、それぞれ式(7.3)

および式(12)を微分することにより、

$$\left. \begin{aligned} r_{\gamma} &= r/\delta - r h_{\gamma} / \{ \sinh(r h/e^{\beta}) + h \} \\ a_{\gamma} &= -(a/2) \cdot r_{\gamma} \theta_0 (1 + \cosh 2r\theta_0) / (r\theta_0 + 1/2 \cdot \sinh 2r\theta_0) \end{aligned} \right\} \quad (15)$$

のように表わされる。以上で得られた解を δ' のオーダーまでで整理すると、

$$\left. \begin{aligned} \phi &= A'' \sin \chi + \delta A'' \cos \chi, & A'' &= a \cosh \alpha, & A'' &= C_1 \alpha^2 \cosh \alpha + C_2 \alpha \sinh \alpha \\ \zeta' &= Y'' \cos \chi - \delta Y'' \sin \chi, & Y'' &= a \cosh \alpha^*, & Y'' &= C_1 \alpha^{*2} \cosh \alpha^* + C_2 \alpha^* \sinh \alpha^* \end{aligned} \right\} \quad (16)$$

となる。以上の解は、水平座標 χ を δ により圧縮して (λ, γ) 系で表示したものであるが、元の (χ, γ) 座標に戻すと、 δ は消去されて、解は、

$$\left. \begin{aligned} \phi &= A'' \sin \chi + A'' \cos \chi \\ \zeta' &= Y'' \cos \chi - Y'' \sin \chi \end{aligned} \right\} \quad (17)$$

のように表わされる。なお、式中の γ^* は水面 γ が、 $\gamma^* = e^{\beta} \sin \gamma$ で与えられることから、

$$\gamma^* = \sin^{-1}(\zeta'/e^{\beta}) \quad (18)$$

のように ζ' を用いて表わすことができる。したがって、式(18)の γ^* を式(17.2)に代入すると、水面波形状が、 $\zeta'_{n+1} = f(\zeta'_n)$ の形で与えられるため、実際に ζ' を求めるためには、 $\zeta'_{n+1} = \zeta'_n$ となるまで収束を行なう必要がある。

計算結果については、講演時に発表する予定である。

《参考文献》

- 1) 日野幹雄, 瀬田知夫; 共形変換を用いた任意断面地形上の波動場の解析法; 第30回海峯論文集, 1983
- 2) 浜中達一郎, 加藤一之; 有限振幅波の浅水変形に対する摂動解; 第29回海峯論文集, 1982